

海外日誌 (二十九)

文部在外研究員 山本一清

大正三年十一月十八日(火)

朝八時半ロンドン(リザ)プール停車場へ發。大變な霧で、汽車は多少遅れるだらうと豫期されてゐた。十時過ぎ漸くケンブリヤ着。何は兎もあれ大學天文臺を訪問。臺長エントントン氏は目下アメリカ旅行中なので、次席のスマーティ氏に面會、八時半午環やシープシヤンクス(十二時半極軸式)寫眞鏡を見せて貰つた。明日再會を約して、次には御隣りの太陽物理天文臺を訪れる。

太陽物理の方で嬉しかつたことは、一昨年の夏キルソン山で知つたカロール氏が今此所の副長であることだつた。こゝでもニウナル(二十五時)望遠鏡や、前のハギンス天文臺から移された十時寫眞鏡や、コンモン氏の三呎反射鏡や、又、南ケンシントン天文臺から移された數多い實驗器械を見た。それから、かの電子の研究で有名なCTRキルソンの室に案内され、數枚の電子寫眞を見せられた。

正午頃、キルソン氏に教へられて、天文臺近くの家に、東京天文臺から研究に来てゐられる萩原君を訪ね、食後伴はれてケンブリヤ大學のあちらこちらを見物した。昔ニウトンが學んだトリニティ學院の内や外、現總長J.J.トムソン氏の住居の前、禮拜堂内にはニウトン、デニスン等の像を見、又、セネートや、キング學院、クイン學院、C.ダービンの家、カズンデシ研究所など、何れも最近の理學史上に連想の多いものであつた。

ロンドン・タイムス紙上に、H.H.ターナー教授がJ.H.ジーンズ氏の最新の宇宙論を紹介して居るのをよむ。

十一月十九日(水)

朝十一時、再び太陽物理天文臺を訪ね、臺長ニウナル氏と一時間ほど話す。正午には招かれてカロール氏とシドニー・サセクス學院の一室内で食事し、大急ぎ自動車で停車場にかけつけ、一時半發の北行列

車にのる。

三時過ぎヒーターボローで乗り換のため下車したのを幸ひ、有名なカセドラルを見る。——五時半同市發。ヨークで又乗り換へのため下車、暫く城壁のほそりを散歩した。

十時、ダーリントン着。東北ホテルの客となる。

十二月一日(木)



ケアンズ大天文臺

の觀測や發見をせられたと思ふと感心せざるを得ない。——望遠鏡を一覽して、家に歸つて樓上の工作室や礦物展覽室などを見て、再び元の室に歸つて來て見ると、主人エスピン氏も出て來られて、自分は朝食の御伴をしながら、色んな話をする。

早朝七時ダーリントン驛から支線の一列車にのり、一時間後、タワロー着。霜の路をふみつゝ、近くにTEエスピン師の宅を訪れた。餘り時刻が早いので、助手ミルバーン氏が始め應接せられ、裏の庭に收められてある九時や十七時や二十四時などの大小反射望遠鏡を見せられた。何れも手製か、或は手製を主とした荒けづりの器械ではあるが、うしたもので、過去四十餘年間に、エスピン氏等が多く

十一時、辭してタウロー發。ダリーントンで乗りかへ、二時半にはダラムに下車した。こゝでは、やはり大學附屬の天文臺を丘の上に訪れたが、生憎、主任サーセント氏が附近の學生運動競技でも見に行つてゐるらしく、不在であつたため、内部を見ることが出来ず只建物の外觀から主な設備を想像したのみ、尤も此の天文臺は大したものではなく、せいゝ十時以下の小さな望遠鏡を二三持つてゐるに過ぎないらしい。——自分さしても此の町に來て、天文臺を見るよりも素晴らしい見事。カセドラルの内外の景色を見たことの方が興味は深かつたと思ふ。建築といひ、其れを圍む天然の景色といひ、こんな立派なものを此の田舎に見やうとは思はなかつた。

午後五時ダラム發。日没後八時半蘇國エデンバラに着、北英ホテルに入る。

十一月二十一日(金)



エドモンドの家の

約により、朝、リース町にカステ氏の店を訪ね、京都大學に買ふ筈の十三吋カルゾー反射鏡を見せて貰つて、要部を一通り検査し、來春自分の乗る砲島丸に積み込み方を頼んで置いて辭去。

十一時頃、エデンバラ市中のカールトン丘上に市立天文臺を訪ね主任ファイルド氏に面會、話したり、器械を見せられたりした。此所は元の王立天文臺の跡で、今より百年ほど前、かのセントラル座A星の視差を發見したヘンダーソンが最初の臺長となつた所である。今は王立天文臺が市の南郊に移り、元の場所が市立となつて、一般市民の天文教育のために用ゐられてゐる。二十一時の望遠鏡があつたりして、

器械も可なりであるが、室内の教育的設備も見事なものを感じた。午後、宿の近くの新學院に佐藤君を訪れた後、再會を約しおき、自分は電車で銀行、ブラクフォード丘上の王立天文臺を訪問した。臺長サムソン教授は、多忙で、充分な御接待は出来かねますが、「と言はれながら時計室や、子午環室や、六吋對物ブリズム鏡、太陽測測裝置、十五吋望遠鏡等を案内せられ、一々丁寧に説明せられた。こゝの時計部設備は世界に有名なものであるが、いかにも感ずる所が多かつた。此の日は朝から天氣が非常に險惡で、雨もふり、風は殊に強かつたが、夕方、佐藤君と、招かれて、ニウ・カレッジ(新學院内の國際テイ・クラブに行つた途中も、困難をした。會は二十數ヶ國の人々が集まつて、可なり愉快なものであつた。此の會で同好會員黒崎幸吉氏に會つた。

十一月二十二日(土)

朝エデンバラを立つて、十時グラスゴー着。クイン街からアーツル街の賑はひを見た後、美術館の傍からケルギン・グロヴ河を超へて、大學を見、次で大學天文臺を訪問。臺長ベツカー教授を迎へられ、九時、七時、二十時(反射式)等の赤道儀や、六吋の子午環を見た。此所の六吋望遠鏡の分光寫眞裝置が昔キラーの分光器のモデルであつたことは面白い。近頃此の天文臺では經度が一秒時ほど間違つてゐることを發見し、近い内に精密な觀測をやり直すのだと云ふ。

午後一時半、グラスゴー・カレドニアン中央停車場發。四百哩の距離を殆んど停車なしに、八時間に走り了つて、夜十時には既にロンドンに客となつたのには驚いた。

十一月二十三日(日)

少々疲勞で、午前中は新聞など読み、室内で休む。午後はグリーン・キチ公園のメイズ・ヒルにモーン・博士を訪ねたが、不在であつたので、ロンドンへ歸つて、南ケンシントン理科博物館を見た。天文部には、W・ハーセルが天王星の發見に用ゐた六吋反射鏡や、ルズリエーの發行した天氣圖や、ドロンドの最初の色消レンズ望遠鏡などがあつた。

十一月二十四日(月)

朝、ケンシントンの宿に駒井氏夫妻を訪問し、暫く話した後、自分は十一時半バデントン停車場發の列車でオクスフォードに向ふ。着いたのは午後一時半、ホテル・クラレンドンへ。

取り敢へず大學天文臺を訪れたが、テイの時刻で皆不在であつたから、又來ることにして、後、ラドクリフ天文臺を訪問した。こゝでは數ヶ月前に赴任して來たばかりの臺長ノクス・シヨウ氏に迎へられ、同氏の父君と三人がテイを頂いた後、二十四時寫眞望遠鏡や、十時赤道儀や、君の他可なり古い子午線器械などを見せられた。こゝでも近いに恒星視差の寫眞觀測を始めると言つて居られる。

夕方、宿へ日中ターナー教授が來訪せられた。

十一月二十五日(火)

寒くて、風を引いたらしい。

朝、オクスフォード大學の有名な學院をあちこちと散歩した後、昨夕の約により十時半大學天文臺を訪問。ターナー、ベラミー兩氏に迎へられ、案内されて十三時の寫眞望遠鏡と、十三時の舊式反射鏡を見、又、地震研究部も見た。ターナー臺長は又長年の寫眞星表研究について丁寧に説明せられた。——それから兩氏と共に自分はブラツクホール街のターナー教授宅に案内され、夫人の厚意によつて午餐を頂く。

午後四時半、發。同六時ロンドンへ歸着。

十一月二十六日(水)

朝十一時、ヒカデリーのパリーントン館にローヤル天文學會本部を訪れ、書記ミス・キリアムスに面會、恰も、そこへ出來て來て居た自分の一論文(キルソン山で昨年やつた太陽研究で、本月のマンズリー・ノテセスに載る筈のもの)の校正をした。

午後五時半、招かれて、ザイオン學院内に開かれる大英天文協會の例會に出席した。先づテイがでて、人々を話しまはる間に、モーンダー夫妻、會長テイ・ギズ師、クロンメン博士等に會つた。六時過ぎより會が開かれ、眞先に自分は會長に招かれて登壇、B.D.變光星統計に關する研究概略を、加へて、日本天文學界のことを述べた。

午後八時半、ボクトリア停車場發、特別急行列車で、十時ニウヘヴ

ン港着。直ぐに乘船、出帆。可なりの荒波にゆられつゝ佛國に向ふ。

十一月二十七日(木)

船は暴風をついて午前二時過ぎ佛港デープ着。三時發の特別列車にのりかへ、六時バリのサン・ラザール停車場着。ホテルへは七時過ぎ自分の不在中、英子は可なり面白パリ生活を、よほど此の都會に馴れたといふ。

十一月二十八日(金)

朝、宿へ、室住氏が水野氏を同道して來訪せられたのには驚いた。世界は案外せまいもの、會ふ人には幾度も會ふ。

午後、散歩した後、ドイツの大使館へ旅券の裏書きをして貰ひに行つたが、大變に人か込んでゐたので斷念し、エトワール附近をゐる。

十一月二十九日(土)

朝、第五區のソムラール街九番地に室住氏を訪ひ、氏の斡旋で、自分等も來月始めから此の家に移ることに定めた。

午後は、宿で、モーンダー夫人より送付されたるB.A.A.雜誌校正刷を修正。それからイタリヤ街あたりまで兩人で散歩。

十一月三十日(日)

朝十時から、水野、室住、松本(史家)三氏と、五人づれて、ヘルラザールの墓地を訪れ、皆々手に案内書なくり廣げながら廣い場所なあるきまはつた。訪れた墓の中に、ボアンソー、アラゴ、アベラール、シヨパン、カルノー、コムト、ゲーリユサク、ドーデ、ラフォンテイン、モリエール、ドラランブル、ワイルドなど、理學者や、哲學者や、音樂家、文豪の有名な人のものが多かつた。(殊に今日はオスカー・ワイルドの死没した日であるのだ。)

「暖かので、空氣の澄んだ此の日曜の半日を墓地に費したのは好い思ひ付きであつた」と、言ひ、そこを去り、ノートル・ダムの裏で寫眞など撮つた後、エトワールの近くの湖で晝食。午後は三時から、又、高島氏に案内されて、折から開會中の「秋のサロン」をグラン・パレイに見た。

十二月一日(月)

朝、荷作り。十一時頃、タクシに總ての荷物をのせて、ホテルからソムラール街第九番 移る。——こゝに暫く落ちついて、ハウス・キーピングなぞして見るつもり。前のエトワール附近よりも場所は落ちるか知れないが、所謂ラテン風の學生まちで、散歩する場所も附近に多く、本屋の澤山あることなども、自分には都合好い事の一つである。

十二月 日(火)

近く蘭獨方面に旅行をするつもりで、まちへ出る毎に、何くれと其の準備の買ひ物をする。

十二月三日(水)

夜、室住氏の室で無線電話の試験をする。たしかにパリの何れかの放送所から演説がきこえて来てゐるが、聲が低いので、波長決定が出来ないので何の局からは判明しない。二人で色々試みたり考へたりしたが、あそこで之れは波長四一〇メートルのバリー學院からの電波に分つた。

十二月四日(木)

朝八時半、單獨、家を出て、北岸車場から出發、オランダからドイツへの旅を始める。先づ午後一時佛國北部のリル市に下車。歐洲大戦に破壊されたまゝの市廳舎など見ながら、フイリプ善王廟場に大學理學部を訪れたが、天文臺は郊外のアムにあるのだと教へられて、又一旦停車場に引き返す。(今夜、ジュバシー天文臺のケニセ氏が當地で火星の講演をするといふ。示が所々に見える。)

停車場廣場からルベール行きの電車に乗り、半時間としてアム村に到着。小供に教へられて、天文臺の門前まで来たが、臺長ジョンケール氏が今は不在だと言はれて、大に失望。十六時の赤道儀を収めたドールの寫眞など一二枚撮影したのみで、元の道を引き返した。——時間の餘裕も無いので、午後五時半リル出發、北行。ブランドン驛でベルギー國の税關を通過。一時アリユッセル着。(着いた此の驛が南の驛ではなくて北驛だと思ひがついたのは、ホテルの室を決めて、食事に外出して、再び自室に歸つて來てからの事であつた!!)

十二月五日(金)

三四

アリユッセルに今は用事は無い。今朝八時、アンデルスへ向け出發九時着。暫く市中を歩いた後、F・ド・ロワ氏(新聞記者で天文家を訪れるつもりで、電車で、デールン町へ行つて見たが、氏は近頃他へ移轉したらしく、何さしても今の居所がわからない。致方なく、元のアンデルス停車場に歸り、午後一時發の汽車でオランダ國に向ふ。)

二時、ローゼンダールで税關検査。それから乗り換へて、夕方五時ウトレヒトに着、ホテル・セントラルに泊る。

食後、大學天文臺のナイランド教授に電話で、明日訪れたいと通じ置き、夜は市街の賑やかそうな所を散歩。

十二月六日(土)

朝散歩かた。ドーム廣場に行き、有名な塔に上る。平地に立つた三四〇尺の塔だから、遠方まで、オランダの田舎の景が見えること!! 約束の時に大學の物理教室の一部を占める太陽物理研究室にユリウス教授を訪問。直立した太陽分光研究設備と、其の若干の結果を詳しく説明せられた。

正午少し過ぎ、ユリウス教授に道を教へられて、デンネンブルグ公園内の大學天文臺を訪ね、先づ宏大な臺長宅に招かれて午餐を頂く。ナイランド臺長は一九〇〇年に、日食觀測の序でを以て、日本へも行ったことがあるとて、其の當時の見聞録手記(京都のスケッチなど見せられたが、中に東京淺草の遊園の畫があつたには赤面した。)

食後、臺長の案内で十時の望遠鏡も見せられた。之れが、日夜、變光星の觀測に用ゐられてゐるのだ。

此の日、自分が此の天文臺を訪問したのが非常な僥倖であつた理由がある。それは、今日午後三時を期して、オランダ中の主な天文臺からの學者たちが、此のウトレヒトの天文臺に來集し、學術上の打ち合せ會を開くといふ好機に偶然出合つたからである。此の日集つた人々——從つて自分が面會した人々は、當ウトレヒトのナイランド、ユリウス兩教授の外に、ライデン大學天文臺からは臺長・シダー氏とオオルト君、アムステルダム大學からはバンネクーク教授、グロニンゲンからはバン・ライン教授があつた。